

# 「釜ヶ崎家庭保育の家」を

## おたずねして



新大阪から地下鉄に乗って、動物園前で下車、地上に出る。ケバケバしい装飾のあるパチンコやの前だった。周郷先生は「くさいね」とポツンとおっしゃった。私は、釜ヶ崎家庭保育の家からいただいた葉書の地図を見た。ちょうどその地図の飛田商店街（もとは遊郭だったとか）と国道をへだてた向かい側に私たちは立っていた。

「この辺でちょっと考えをまとめて、電話をしてから行こう」といわれる先生について「喫茶、日本一」という店に入った。東京の喫茶店につきもののピンクの電話はいくら見回しても見えなかった。店の中には子どもづれのおかみさんふうな人とか、昼からアルコールの入っているような中年の男の人とか、ちょっと喫茶店というイメージとは遠い店で、おそろおそろ「公衆電話はありますか」とたずねた。「あそこのパチンコやの前です」といわれて外へ出る。国道の騒音を背にダイヤルをまわすと「ハイ、釜ヶ崎家庭保育の家です」と若い声、「これからうかがいます。道はわかります」と電話を切って歩き始めた。一応アーケード風な商店街、浅草の新仲見世の道幅を狭くしたような感じだった。

「パチンコ、ニュー大阪」という店の角を、地図の通りに左に折れて、最初の四つ角を左に折れるとすぐに薬局があったので、右に折れた。でも道というより小路といった感じで㊦ホテ

ルとかそんなたぐいの看板の家が並んでいる。「本当にここかしら」と歩いている内に道のはずれにきてしまった。やはりここらしいと、また戻って行き会った小母さんにたずねると、何とその㊦ホテルの隣りだった。

玄関をあけると、元気のいい若い保母さんの声につづいて「さあどうぞ 先生どうぞ」とストロームさんの声がして、私たちはこたつのまわりに案内された。ちょうどお昼寝の間らしく、ストープであたためられた二十畳ぐらいの部屋には、下着姿の子どもたちが真赤なほほをして眠っていた。一人だけ靴を大事そうに両手にもって、キョトンと起きている子どもがいて、一月から入った新しい子どもだと説明してくださった。

「先生のお名前は？」ときかれるストロームさんに先生が名刺をお出しになると「しゅう？」と読まれる。先生は急いでローマ字で「すごうひろし」と書かれると「あ、珍しいお名前ですわね」、こうしてポツリポツリと先生とエリザベス・ストロームさんの対話が始まった。(かっこの中は保母さんたち)

\* \* \*

S 私は、六年くらい前にテレビで始めてストロームさんのことを見ました。その時最後に雪の中をストロームさんが詩を、自分で作った詩を口ずさみながら歩いているのが、非常に感動的で、その時からずーっとお会いしたいと思っていました。

E 雪？ 私はそのテレビ見てません。でも釜ヶ崎には雪ありません。ドイツかもしれませんねー笑いー

\* \* \*

S 動物園前で地下鉄をおりましたらね、何か臭いでしょ？

(アルコールとおしっこ……)

E 便所、ないですから……。

S ああ、ないんですか、

(いいえ、三カ所ぐらいあるんですけど、みんなその路地とか、どぶでしちやうんです。夜なんかもっとひどいです)

E 私にはわからないです。

(もうしみこんでるんですよー笑いー)

S それで考えましたけどね。ストロームさんが、こんな臭いのする釜ヶ崎へ来て十年、こういうことをやらないではおれなかった、それはどういう心でしょうか、日本人にわかるでしょうか？

E そこについては私、考えてないんです。考えたら返事にならないから……。

なんか、この間、あるカトリックのシスターが見えてインタビューなさいました。それで、ほんと、新聞社と同じ質問なさるのね。まず第一に、釜ヶ崎へ来た動機は何ですか？ 同じクエッションです。なんであなたは釜ヶ崎へ来なかつ

たのですか? ……

\* \* \*

S 私は、日本で一番古い幼稚園の園長を四年間やってきました。そして園長をしながら、日本の将来はますます暗くなるような気がしてきました。それでずっとあこがれていたストロームさんに会いたいと思いました。お会いするということがだけで解決できるとは思いませんが……。

日本の人は、ストロームさんがやわないではいられないでしていられることを、なぜか、「外人だから」「外人はああいうふうを考えるものだ、日本人とは違うんだ」というふうについて、うまく逃げているような気がするんですが……。

E そうそう、そういうふうによくいわれますね。

\* \* \*

S ぼくのやりきれない気持ち、日本人でありながら日本人を見ていると気味が悪い、こういうことをぼくの外人の友人に話すとかえっておかしいといわれます。

E 日本の人が気味が悪い?

S ええ、私としては日本人があまり何も考えないことです。自分も空気をよごしているし、ごみも出しているのに、そういうことをあんまり感じていませんね。

E 感じていないんでしょうかしら……そう……感じてないん

でしようね。

S 人が困っても、共感、シンパシーというものを感じなくなりました。大人もそうですけど子どももそうなんです。涙も出なくなりました。

E それは最近のことですか?

S ええ最近、もう数年前から……。そして今、ますますそうなんです。もとは、敗戦の前は、人が困っていると涙が出ましたよ。

E そして、何かやろうという意識がありましたか?

S ええ、ですが戦争に負けて、朝鮮戦争のあと経済成長して、そういうセンス、フィリングがなくなっちゃいました。小さい子どもも。大人がそうですから、感情の動きを教わる機会がない。

E いや、私の見方では、今、私の目で見ている日本の社会はですね、人の困ることを、見るは見てるんですけど、それは仕方がない、という心がすぐあるんじゃないか、それが私が見ている日本人の態度です。

何でもかんでも仕方がない、何でもかんでも面倒くさいとほっておく、あきらめる、そういう性格、というほどはいいたくないんです、クセですかしら。

S クセ、習慣、でしようね。

E そのクセは、最近出てきましたかしら。先生のおっしゃる通りだと、昔からじゃないんですね。

S 昔からあるにはありました。でも今ほどではないと思います。日本独特の短歌とか俳句に見られるように、人の悲しみもわかりましたし、自然の美しさをわかるという気持ちはありました。

E 自然はなくなりませんでしたね。

S そう。それから都市に住むようになりましたね、人の悲しみなんかわかってたら都市では生きちゃおれない。子どもも大人も何でも面倒くさいんです。

\* \* \*

E 私の立場からみると、個人じゃなくて、社会福祉の立場からみると、私の国と日本、私の社会と日本の社会、私の国の歴史と日本の歴史、これをくらべることは本当は無理なんですけれど、もしくらべたならば、私の国の方は福祉事業の歴史が長い、古いでしょう。

S こちらは、国立でも私立でも福祉事業の歴史がない。といったらいいすぎですが、ほとんどないですね。

S ほとんどない、そう思います。

E 一人だけがどこかでやっても、一生懸命やっても歴史にならないです。向こうは、一人でやったり、グループでやったり

りします。するとそのグループは何かよい影響を及ぼす、政治に対しても力をもつてきます。もちろん民生もついてくる、どうしても歴史になるんです。こちらは、個人個人の活動はあっても民生の活動にならない、だから国の社会福祉事業が弱い。それはどういうわけでしょうか。

S ぼくは、今ストロームさんがいわれたことは、始めて聞いたような、フレッシュな感じがあります。歴史にならないという……。日本では、そういう人が何人かいても、お役人も国民もケチをつけてこわしてしまおう。

E その通り、その通りです。

\* \* \*

S ストロームさんが以前、ハイマートとは何をいうかと、生きているある仕事があつて、愛する人がいて信頼され愛されていけば、そこそハイマート”といわれたのを読んで、非常に感動しましたが、歴史にならないと今いわれたことと、多少関係がありますね。

E 日本人はハイマートがないんです。生れ故郷はこわされ、都会に来ればみんな孤立して隣りとも関係ない、誰も愛さない愛されもしない、だからハイマートがないです。

E それはちょうど工業革命と一緒に、そういうことがおこりました。西洋にも同じ経験があつたと思います。

しかし日本の場合、もし私が西成区で生まれた、となれば西成は私の家となり、本籍もこちら、私が北海道へ行っても九州へ行っても盆やお正月には家に帰ります。だから都会へ行っても家から完全に切れない、都会へ行っても友だち作る必要がないんです。

S ええ、日本はそうですね。

E 根はここに残ってます。それは西洋と違います。私はこちらで生まれても、もしこの大阪から名古屋とか東京へ行く時は、ここを切るんです、何も残しません。パスポートには生まれた場所を書いてあります、でもそれだけのことです。どうしてもハイマートを作らなければならぬんです。

「家」という考え方じゃなくて、「私」という考え方深いです。

\* \* \*

E 日本の人は戦争が終わって、ヨーロッパを見てびっくりしました。そしてそれをとり戻すのに一生懸命になって、今度はあるところは学び、あるところはちよっと上へ出てきて外国からいろいろいわれています。西洋の真似して、見たり、うけいれたり、〃仕方がない、かまいません〃といいながらここまでできました。今度は、いらぬものを捨てるのじゃないですか。その時が必ずくると思います。

S ただ、日本人にそういう選択能力があるでしょうか。

E あります。でもまだその時期はきていません。今はまだ西洋を真似して同じことを競争してやりたい、そうしないと心配だという気持ちがあります。しかし、私の目で見ると、その心配は必要ないと思うんです。ですけど、日本人自身はまだけわかっていないと思います。

S 私もそう思いますけど、あまりにも外国と競争し、はり合う気持ちが強すぎます。

E はい、そうですね。しかしある程度までは競争も、自分の存在のために必要でいいと思います。で、しばらくは西洋が負けた、よう、でした。それで今は、西洋が立ちあがったというのが今の状態です。

これから日本は、日本の昔の精神を思い出したらば、今までの武術的な競争と共に、日本のスピリット、霊が入ったならば、西洋はまけるのじゃないかと思えます。これからが西洋と東洋があうことになります。

S 私はちよっと、そのところがわからないが、競争じゃなくて、友人になるという状態にはどうしたらなれるでしょうか。

E 友だちになったらいいですけど、具体的にどうなるんでしょう。ちよっとわかりません。

\* \* \*

S ストロームさんは、昔から日本にあったスピリット、靈を価値あるものと思えますか？

E はい、思います。

S ぼくは日本人だからわかりませんが、西洋人や中国人のもってきた精神は、もつとスケールの大きいものじゃないかと思うんですが……。

E そう、西洋のもつてるもの、東洋のもつてるもの、もち方が違うと思います。

西洋のもつてるものはスタティッシュ、テオレティッシュです。そしてこちらは、どうでもいい、仕方ないといいながら、何かアクティブのような気がします。向うは、完全じゃなきゃ断わるんです。殊に私の苦勞するのは神学の言葉です。完全に、完結しなきゃいけないんです。

S 中国はどうですか？ ぼくは、中国はキリスト教の力をかりずに、キリスト教的改革をしたように思いますが……。

E 中国のことはわかりませんが、大したことをしたと思いませんね。

\* \* \*

E 日本人は、西洋人に会うと二つの心がありますね。一つは、西洋人を尊敬し、ごていねいにする。そして同時に、一つは

あのへんな外人という気持ちがあるじゃないですか？ — 笑い —

それから、日本の人は、美しいものときたないもの、美しいとそうでない、非常にはっきり区別しますね。これは何か宗教的なものではないですか？ 客間、応接間、きれいにしますね。台所はきたなくても……。

S そうですね、神道の、汚れをいみきらう、それでそうかもしません。

E そうでしょう？ そこに差別観、釜ヶ崎はきたない、部落はきたないという考えが出てくるんじゃないですか。

S 政治にもそういう面がありますね。公害、きたないもの、それはどこかへおしやればいい、見えなければいい、という……。

E きたない、だから直しましょう、きれいにしましょうという気持ちがないです。

昔のことはよく知りませんが、大阪城のまわりには何か、大阪城の関係の人しか住んでなかったんじゃないかと思えます。現在も環状線の中、東区、南区とか、本町と心斎橋のあの辺までは、会社、銀行、問屋さんばかり、その外側はドーナツ形に、全部問題地域です。区別されています。これはやはり宗教的な何かあると思います。日本ではキリスト教でさ

え、「日本教」になっています。

S 本当にそうですね、こういうことはちよつと考えて見ませんでした、宗教的なもの……ね。

この対話は、お昼寝からさめた子どもたちの中で、ストロームさんは子どもたちに心をくばりながら、先生も時折、子どもたちの相手をされながら、二時間あまりの時間、続けられました。チョコチョコときて先生の頭をポンとたたいて行った子ども、私のひぎに、しらない間についてきた子ども、お昼寝からさめきれないままに、畳の上にウンチをしてしまった子ども、にぎやかなその中で熱心に話し合われました。

先生が大学でフィロソフィのプロフェッサーをしているとつしゃるとストロームさんは「その大学の卒業生は、どういふ所に就職しますか？ 一人保母さんがやるので」とすぐおつしゃった。先生は「こういう所へきて手伝えば、学問するよりもよほどいい」と、帰ったら 感動をこめて学生にこの話をしましょう」と別れ際に固い握手をされた。「私もここへ来たい」という私には「あんたは年ととりすぎて」とつれなくおつしゃったのに……。

ほんの短い時間で、ストロームさんのお仕事をのぞいたにすぎないが、先生はおそらくもつともつと深くお入りになれたに

違いない。それにしてもしみじみと考えたことは、

「私は今まで何をしてきたのだろうか、そして、これから何ができるといふのだろうか」ということだった。

(二月五日赤間記)

エリザベス・ストロームさんのこと

一九二二年二月二日 南ドイツ、ヴェルテンベルク州、フリーインハイム村に生まれる。

聖書学院卒業。父親は施設で刑余者の面倒を見ていた。

一九五三年十一月十五日、ルーテル教会宣教師として来日。

一九六四年秋から、大阪市西成区の「あいりん地区」釜ヶ崎

で乳幼児の保育活動をつづけている。その間、大阪府立社会事業短期大学で学ぶ。

著書 「釜ヶ崎はワタシの故郷」教文館発行

日本保育学会第二十六回大会のお知らせ

会期 昭和四十八年五月十九日(土) 二十日(日)

会場 大妻女子大学

内容 研究発表・講演・シンポジウム他

連絡先 東京都千代田区三番町十二 (03)九八四一